

複文の主節述語となるテモラウの意味 —連用中止形節複文の場合—

呉丹

The Meaning of “V-te-morau” as a Main Clause Predicate in Compound Sentences: A case of “V-si” subordinate clause compound sentences

Dan WU

Abstract

This paper considers “V-si, V-te-morau” and examines whether the meaning of “V-te-morau” in compound sentences with such a structure approaches the causative sense or passive sense. Although many studies have discussed whether “V-te-morau” has a causative or a passive sense, many of these studies have focused on elements in the text.

However, when considering the meaning of “V-te-morau,” it is thought that the structure of compound sentences influences the meaning of “V-te-morau,” but this has not been considered in detail in earlier research. Therefore, from the viewpoint that the structure of compound sentences influences the meaning of “V-te-morau,” in this paper, “V-si, V-te-morau” is considered for the purpose of examining the meaning of “V-te-morau.” In the analysis, the relationship between the content of the subordinate clause event and the main clause event is considered, that is, whether the subordinate clause event is used to realize the main clause event. Results show that when the subordinate clause event is a situation created for the realization of the main clause event, that is, when the subordinate clause event is a direct action for the agent and when it is a preparatory action for the realization of the main event, “V-te-morau” in the main clause has a causative sense. On the other hand, when the subordinate clause and the main clause have a mere temporal context or a parallel relationship, “V-te-morau” in the main clause is not affected by the structure of the compound sentence, and its meaning becomes causative or passive or cannot be said to be either.



目次

1. はじめに

2. 先行研究

2.1 複文の認定及び連用中止形節の複文についての研究

2.2 複文のテモラウ文と関連する複文の使役文についての研究

3. 考察対象と分析方法

4. 「V- シ、V- テモラウ」における連用中止形節の内容

4.1 与益者に直接向かう働きかけ

4.2 主節事態実現のための状況を作る準備動作

4.3 単なる時間的に先行する事態や並列の事態など

5. 「V- シ、V- (ラ) レル」の複文の性質

5.1 連用中止形節事態が動作主体（二格項）に向かう動作である場合

5.2 連用中止形節事態が動作主体に向かう動作ではない場合

6. 「V- シ (テ)、V- (サ) セル」・「V- シ (テ)、V- テモラウ」・「V- シ (テ)、V- (ラ) レル」の異同

7. まとめ

1. はじめに

テモラウ文は、恩恵の授受を表現するために用いられる文であり、一般的に授受補助動詞文の中で論じられるが、その恩恵をどう受け取ったかについて使役・受身とかかわる点があるため、しばしば使役文・受身文と比較して考察される。テモラウ文において恩恵を受け取る手段は二通りの可能性がある。一つは実際の動作主体（二格項）に働きかけて動作を引き起こしその動作から恩恵を受け取る場合と、もう一つは実際の動作主体に働きかけず一方的に動作主体の動作から恩恵を受け取る場合がある。次の(1)はその前者であり、(2)はその後者である。

(1) 子供に一人で部屋を掃除してもらったⁱ。

(2) 太郎が先生に字をほめてもらった。

(1) は一般的に主語（話し手）が動作主体（「子供」）に依頼や命令などの働きかけをして「子供」の「部屋を掃除する」という動作を実現させ、その動作から恩恵を受け取ったと解釈される。(2) は「学生」から「先生」への働きかけがなく、一方的に「ほめる」という動作から恩恵を受け取ったと解釈される。(1) のような働きかけがある場合は恩恵という意味を除けば使役文に近くなり（「子供に一人で部屋を掃除させる」）、また (2) の場合は恩恵・被害の意味の違いを除けば

受身文に近くなる（「太郎が先生に字をほめられた」）。このようにテモラウ文は使役・受身に近い意味を表す場合があることから、これまでの先行研究で様々な観点からテモラウ文の使役的／受身的な意味の表す条件を考察している。

しかし、これまでの研究では、文中の要素に注目してテモラウの意味を考察するものは多く見られるが、複文の構造がテモラウの解釈に影響するという観点からテモラウの意味を考察するものはないように思われる。実例を調査したところ、テモラウが単文構造よりも、複文構造に多く用いられる傾向があることからⁱⁱ、複文に用いられるテモラウの意味を考察する必要があると思われる。例えば、次の (3) (4) はそれぞれテモラウがテ形節複文の主節述語、連用中止形節複文の主節述語となる文であるが、これらにおけるテモラウの意味は複文構造の影響を受けていると思われる。

(3) 部長が部下に頼んでコピーをとってもらった。

(4) 部長が部下に頼みコピーをとってもらった。

(3) (4) は、それぞれテ形節事態「頼んで」、連用中止形節事態「頼み」から、「部長」から「部下」へ依頼的な働きかけがあると考えられ、これらの文ではテモラウは使役に近い意味を表していることがはっきりと分かる。

複文の構造がテモラウの意味解釈にもたらす影響を

考察する一連の研究で、呉（2020）はテモラウがテ形節複文の主節述語となる複文「V- シテ、V- テモラウ」を対象として考察しているⁱⁱⁱが、テモラウが主節述語となる複文には、テ形節の複文だけでなく、連用中止形節の複文「V- シ、V- テモラウ」も多く観察される。呉（2020）に続く本稿では、連用中止形節を伴う場合を取り上げ、この構造におけるテモラウの意味が使役に近くなるかそれとも受身に近くなるかを考察する。

2. 先行研究

2.1 複文の認定及び連用中止形節の複文についての研究

テ形・連用中止形で繋がれる文が単文であるか複文であるかについては、異なる立場の研究がある。例えば寺村（1982）は、単文と複文の連続性を認め、「並列」を表すテ形・連用中止形を複文に属するものとして認め（「おじいさんは山へ行き、おばあさんは川へ行く」）、それ以外の意味を表すものを単文に属するものとして認めている（「お爺さんが山へ行って、柴を刈った」）。また、言語学研究会・構文論グループ（1989a,b）は、テ形・連用中止形の大部分は「ひとえ文」（単文）と「あわせ文」（複合文）の中間にある「ふたまた述語文」（一つの主語に対して述語が二つある文）であるとしている。言語学研究会・構文論グループ（1989a,b）では、テ形と連用中止形をそれぞれ「第二なかどめ」、「第一なかどめ」と呼び、「従属的な関係のなかにある、ふたつの動作・状態は第二なかどめの形で表現されるのにたいして、非従属的な関係のなかにあるそれは、第一なかどめの形で表現されるのである」（1989a:14）と指摘している。例えば、次の（5）のテ形節の文では、従属節「メガネをかける」と主節「新聞を読む」とは従属的な関係をなしており、それに対して、（6）の連用中止形節の文では、従属節「学校に行く」と主節「公園に行く」は従属的ではなく、並列的な関係をなしている。

（5）太郎はメガネをかけて新聞を読んでいる。

（6）兄は学校に行き、弟は公園に行った。

一方、テ形・連用中止形で繋がれる文を複文として認める研究は、仁田（1995、2014）、日本語記述文法研究会（2008）などがある。仁田（1995）はテ形の表す意味・用法を詳しく記述し、さらに仁田（2014）はテ形と連用中止形の間関係について「テ形と連用形によって形成される節は、基本的に同じ使われ方をする。ただ、連用形からなるものは、文体的に古く、書き言葉で使われ、話し言葉に使われることはあまり多くない」（p. 420）としている。また、日本語記述文法研究会（2008）は、テ形・連用中止形は「並列、対比、前触れ、継起、原因・理由、付帯状況」の意味を表すとし、テ形・連用中止形には「複数の事態を結びつける複文の用法がある」（p. 281）と指摘しており、テ形・連用中止形で繋がれる文が複文であることを積極的に認めている。

本稿では、上記の先行研究を参照して、単文と複文は連続性を持つものとして考え、テ形・連用中止形を含む文を複文として考える。こう考えるのは次の2点に関わる。一つは、本稿を、テ形・連用中止形節や条件節、原因・理由節などを含む複文構造に用いられるテモラウの意味を考察する研究の一部とするためである。もう一つは、本稿の直接の先行研究である山田（2004）や高（2014）、早津（2015）（2.2節）などが「V- シテ、テモラウ」構文と「V- シ（テ）、V- サセル」構文を複文として認めており、これらの研究と用語を統一するためである。

2.2 複文のテモラウ文と関連する複文の使役文についての研究

これまでに、テモラウが主節述語となる複文においてどのような意味を表すかに言及した研究は管見の限り山田（2004）のみである。山田（同:125）では、「継起的なテ節を含む複文では、前件と後件の主語が同じ場合、前件が意志動詞であれば、後件のテモラウ受益文は働きかけがあると解釈される」とし、また「この

ような制約は継起的なテ節複文の場合にのみ有効であり、同じテ節複文であっても同時（付帯状況）的な場合には働きかけ性^{vi}において多義である」としている。しかし、複文に用いられるテモラウの意味に関する山田（同）の指摘はここまでに留まる。

使役文にも「母親は子供に頼んで買い物に行かせる」のような同じ構造の複文がある。高（2014）は「V-サセル」が文中でとる形・機能と「V-サセル」の意味の関係を考察する中で、早津（1998）を参考にし、「V-サセル」が主節述語となる複文（「V-シ（テ）、V-サセル」）における従属節の事態を考察している。「V-シ（テ）、V-サセル」の複文において、従属節事態は「（ア）動作要求的な働きかけ」（「命じて」）、「（イ）態度的な働きかけ」（「脅し」）、「（ウ）駆使・選抜」（「使って」）、「（エ）派遣型」（「派遣し」）、「（オ）授与型」（「あたえて」）、「（カ）物理的な働きかけ」（「起こして」）「（キ）その他の働きかけ」のような使役対象にかかわる使役主体の動作を表すものと、「（ク）準備」（「手紙を書き」）、「（ケ）きっかけ」（「異変を察し」）、「（コ）方法・手段」（「睡眠術を使って」）、「（サ）原因」（「反論して」）、「（シ）単なる継起、羅列、対照的な事態」のように、使役対象とかかわらない使役主体の動作を表すものがあるとされている。

また、早津（2015）^vでは、「V-シ（テ）、V-（サ）セル」の複文を対象とし、従属節の動詞の語彙・文法的な性質に注目して、従属節の事態と使役文の意味との関係について考察している。早津（2015）では、従属節の事態を「A 動作の要求・誘導」「B 動作を行う立場や環境のつくりだし」「C 意識の誘導」「D 身体部位への関わり」「E 動作主体に向かうのではない種々の動きや状態」というように5つに分類し、従属節の事態と主節の意味との関係について、従属節の事態がA、B、Cの場合には主節使役文の意味が「Ⅰ意志動作の引きおこし」となり、従属節の事態がDの場合には主節使役文の意味が「Ⅱ身体運動の引きおこし」と「Ⅲ生理変化の引きおこし」となり、従属節の事態がEの場合には主節使役文の意味が「Ⅳ心理変化の引きお

こし」となると指摘している。

本稿ではテモラウの複文「V-シ、V-テモラウ」を考察した後、早津（2015）で考察した「V-シ（テ）、V-（サ）セル」の複文と比較して、両者の異同を明らかにする。

3. 考察対象と分析方法

本稿では、国立国語研究所「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（BCCWJ）から、検索アプリケーション「中納言」を利用して用例を収集した。検索対象のジャンルを「書籍」に設定して検索した結果、15,146例がヒットした^{vi}。その中から手作業で本動詞として使用されている例（「この折りは、そのとき土産用としてもらったもので、最初からおっかさんに上げようと思って持ってきた。」）や翻訳作品を除外し、「V-シ、V-テモラウ」構造の複文を263例収集した。また、テモラウの複文と比較するため、受身の複文「V-シ、V-（ラ）レル」をその半分ほどの130例ランダムに収集し、本稿の考察に用いた。

次の第4節以降、早津（2015）で指摘されている使役の複文における従属節事態の分類を参考にし、連用中止形節複文の従属節事態と主節事態のありかたと、主節のテモラウの意味が使役的なのか受身的なのか、あるいはどちらともいえないのかを考察する。前節で紹介したように、早津（同）では、使役の複文の従属節事態について「A 動作の要求・誘導」「B 動作を行う立場や環境のつくりだし」「C 意識の誘導」「D 身体部位への関わり」「E 動作主体に向かうのではない種々の動きや状態」があると指摘されているが、今回の調査でも同じようにテモラウの複文の連用中止形節を分析し、その結果、これにも（A類）～（E類）の5種類が同様に観察された^{vii}。これらについて、働きかけが与益者（本節末尾で定義する）に向かうか否かという点でまとめると、従属節で与益者に直接向かう働きかけについて述べられるもの（下の例（7））と、与益

者に直接向かうのではないが、必要な状況を作り出すために準備動作をすることについて述べられるもの（下の例（8））、そしてそれ以外の単なる時間的な前後関係や単なる並列を表すもの（下の例（9））の3種類が認められる。

- （7）友達に頼み荷物を運んでもらった。
- （8）ハガキを書き、弟に郵便局に出してもらった。
- （9）昨日母親と映画を見てお茶を飲み、洋服を買ってもらった。

上記の（7）は従属節で与益者「友達」に直接向かう働きかけ「頼む」が述べられる文であり、（8）は従属節「ハガキを書く」という動作は与益者「弟」に直接向かうのではないが、「郵便局に出してもらう」という動作を実現させるために必要な準備動作をしていることが述べられる文である。（7）と（8）は従属節事態が主節事態の実現のために必要な状況を作り出しているという点で共通している。それに対して、（9）は従属節と主節の関係が単なる時間的前後関係の文であり、従属節で述べられているのは主節で述べられている事態にとって単なる時間的に先行する事態である。

後述の4.1節では、上記の（7）（8）のような、連用中止形節事態が主節事態の実現のために必要な状況を作り出すことが述べられる複文を考察し、この場合の主節のテモラウが使役的（引き起こしの）な意味を表すことを述べ、4.2節では、（9）のような、連用中止形節と主節が単なる時間的な前後関係や並列の関係を表す複文を考察し、この場合は複文の構造が主節のテモラウの使役性／受身性に影響せず、主節のテモラウは使役に近い意味を表す場合と受身に近い意味を表す場合、どちらとも言えない場合があることを述べる。5節では、似た構造をとる受身の複文「V-シ、V-（ラ）レル」を考察した上で、使役・テモラウ・受身の複文の三者の異同について考える。

なお、本稿では、叙述の便宜上、テモラウ文「部長が部下に頼み、コピーをとってもらった」において、

文の主語（「部長」）のことを「受益者」と呼び、実際の動作主体（「部下」）のことを「与益者」と呼ぶ。

4. 「V-シ、V-テモラウ」における連用中止形節の内容

連用中止形節の複文263例のうち、従属節で与益者に直接向かう働きかけについて述べるものは89例、与益者に直接向かうのではないが、必要な状況を作り出すための準備動作について述べるものは58例、この2種が合わせて148例あり、全体の6割近くを占めている。単なる時間的先行する事態や並列関係の事態などについて述べるものは115例（4割ほど）ある。

4.1 与益者に直接向かう働きかけ

従属節で与益者に向かう働きかけが述べられる場合は、早津（2015）で指摘している使役の複文と似ており、従属節で「A動作の要求・誘導」「B動作を行う立場や環境のつくりだし」「C間接的な誘導」「D身体部位への関わり」の4種類のタイプが観察されている。これらの文は、テ形節の複文「V-シテ、V-テモラウ」と意味的・構造的に非常に似ており、連用中止形節で働きかけの具体的内容が述べられ、その結果として、与益者の意志動作の引き起こし・実現が主節で述べられる。両者の違いは一方がテ形、もう一方が連用中止形が用いられるという文体的な違いである。以下では例を示しながら見ていく。

（A）【動作の要求】

〈（与益者ニ）頼み、仰ぎ、依頼し、お願いし、話し、電話し〉

連用中止形節で表される受益者の動作の要求は、すべて言語活動によって行われるものである。このような言語活動による要求が原因・理由になって、その結果として、与益者の動作の引き起こし・実現が主節で述べられる。この（A類）の文は19例ある。

- (10) 私は建設業をしていた叔父に改造を頼み、すぐにとりかかってもらいました。(ヒロコ生きて愛)
- (11) 十一月に立川市で行なわれた市民マラソンには、多くの素人カメラマンに協力を依頼し、参加者のいろんな表情を追ってもらった。(ビデオジャーナリズム入門)
- (12) すぐに警察に連絡し紛失証明書を発行してもらう。(ぴあ map グラム・サイパン文庫)

例えば(10)は、受益者である「私」は与益者である「叔父」に「頼む」という要求の働きかけをし、その結果与益者「叔父」の動作「とりかかる」を引き起こして、その動作から恩恵を受け取っているという性質の文である。

このような言語活動で行われた動作の要求は、受益者が与益者に働きかけているということが最もうかがえるタイプである^{viii}。

(B) 【動作を行う立場や環境のつくりだし】

この類の動詞が従属節述語として用いられる複文は、与益者に動作を行うためのふさわしい立場や環境を作り出すことを従属節で述べ、そうすることを通して与益者の動作を引き起こすことを主節で述べるという性質の文である。このような従属節で動作を行う立場や環境のつくりだしについて述べる文は (b-1) 類と (b-2) 合わせて 7 例観察されている。

- (b-1) 社会的立場や役割のつくりだし
〈(与益者ヲ) 編成し、(与益者ヲ) 利用し〉
- (13) それを調べるため、「温チーム」と「冷チーム」を編成し、まずは階段の昇り降りをしてもらいました。(ためしてガッテン効果がすぐ出る安心健康法)
- (14) 職員等の人脈を利用し、適任者を紹介してもらう。(高齢者ケア施設マニュアル)

(13) では、文中の「それを調べるため」からも分

かるように、「(「温チーム」と「冷チーム」を) 編成する」ことを通して与益者に社会的立場や環境を作り出し、それを受けて「階段の昇り降りをする」動作を引き起こしているということが述べられている。

(b-2) 到着点での動作を見こした移動

〈(与益者ヲ場所ニ) 招き、呼び、迎え〉

この類の従属節動詞は移動動作を伴う動詞であるが、その移動を行わせることを通して与益者の(主節での) 動作のためにふさわしい社会的立場や環境を作り出しているという性質がうかがえる。

- (15) 余も亦一日曹老師と趙アホンと三人の大学生とを招き、念経をして貰うた。(イスラム巡礼白雲遊記)
- (16) その後、9 時にマッサージ師を呼び、二人で全身の疲れと凝りを取ってもらった。(ガサ!)

(C) 【間接的な誘導】

連用中止形節で「授与・提供」「伝達」「対向的態度」「移動」の意味を表す動詞が用いられ、与益者への間接的な誘導が表されるものがある。このような性質の動詞は「A 類 動作の要求」を表す動詞ほど働きかけ性が強くないが、その動作を通して働きかけていることが確かである。間接的な誘導を表す従属節には以下の (c-1) - (c-4) の 4 つの下位類が見られる。

(c-1) 与益者に物を授与・提供する動き

【{人} ニ {物} ヲ V (授与・提供)】

〈(与益者ニ物ヲ) (金を) 使い、差し入れ、あげ// 届け、渡し、配り、配布し、提出し、用意しておき〉

(c-1) 類には、所有権の移転が伴う「授与類」の動詞と、所有権の移転が伴わない「提供類」の動詞が含まれる。下記の (17) (18) は授与類の動詞が用いられる例であり、(19) (20) は提供類の動詞が用いられる例である。この (c-1) 類は合わせて 16 例ある。

(17) かれは金を使い、大坂の昆布屋仲間にも入れて

もらっていた。(狐官女)

(18)私は持って行ったチョコレートをあげ、その代り彼に水泳を教えてもらった。(日本語教師が見た中国)

(19)カードはあらかじめ何枚か用意しておき、その中から失語症の人に選んでもらいます。(失語症の人と話そう)

(20)発泡スチロールを排出する全ての事業者にアンケート調査票を配布し、各自の発泡スチロール排出状況を記入・返送してもらう。(発泡スチロール再生利用マニュアル)

(c-2) 与益者に情報を伝達する動き

【{人} ニ {事} ヲ V (伝達)】

〈(与益者ニ事ヲ) 伝え、述べ、示し、(言葉を) 交し、(事情を) 話し、問い合わせ、書き、説明し、報告し、紹介し〉

この類の動詞も言語活動を表す動詞であるが、上記のA類のような動作要求を表す動詞ではない。言語活動によって直接的に動作を要求しているものではないが、次の(21)を「送付してもらおうと、担当窓口に問い合わせた」のように言い換えられることから、働きかけていることがうかがえる。この(c-2)類は17例ある。

(21)所定の期間内に届かない場合は、各担当窓口に問合せ、送付してもらいます。(建設業許可Q&A)

(22)小泉厚生大臣の家を訪ねて事情を話し、辞めることを了承してもらう。(東条英機暗殺の夏)

(c-3) 与益者に対向的態度を示す動き

【{人} ニ V (対向的態度)】

〈(与益者ニ/ト) 働きかけ、約し、会い、結び〉

これらは、与益者に態度を示すことを通して与益者に間接的に働きかけ、その動作を行う意識を誘導することを従属節で述べ、主節で与益者の動作を引き起こすことを述べる性質の文である。例えば次の(23)は

「大軍を朝鮮半島に派遣してもらうために、唐と同盟を結んだ」に言い換えられ、働きかけがあることが分かる。この(c-3)類は12例が観察されている。

(23)春秋は唐と同盟を結び、大軍を朝鮮半島に派遣してもらった。(逆説の日本史)

(24)千九百五十四年に二枚目のパーソナルレコードを録音し、サン・レコードの経営者サム・フィリップに会い、この曲を聞いてもらった。(風俗史からみた1960年代)

(c-4) 与益者の居る場所への移動を伴う動き

【{場所} ニ V (移動)】

〈(与益者ノイル場所ニ) 行き、移り、赴き、立ち寄り、進み、駆け込み〉

このような文では、従属節内で移動動詞と二格やへ格の場所名詞がくみあわさり、社会的役割のある場所への移動を表し、その場所にいる与益者の社会的役割を利用することで間接的に働きかけることを述べている¹⁸。移動を表す間接的な誘導は19例観察されている。

(25)そこで、当の歯科医にいき、自分が小さいころから、パティエの名前で通していたことを、一筆書いてもらった。(オーストラリア6,000日)

(26)多田は電車道にある堀留交番に立ち寄り、ゆかたを扱う問屋の名を二、三教えてもらった。(現代民話)

(D) 【身体への関わり】

〈(与益者ヲ) 突き〉

連用中止形節で身体への関わりが表されるものも観察されたが、1例のみであった。この文の主節では生理的变化「失神する」の実現が表されている¹⁹。

(27)ケイはあわてて鳩尾を突き、かわいそうだが失神してもらった。(キスは殺しの始まり)

以上で、連用中止形節で与益者への種々の働きかけが述べられる複文を見てきたが、前述のように、このような構造の複文は従属節で与益者への働きかけの具体的な内容が表され、それが原因やきっかけとなり、与益者の意志動作の引き起こしが結果として主節で述べられる性質の文である。これらの複文では主節事態がほとんど意志動作の実現であり、主節事態が生理的変化の実現（例（27））のものと心理変化の実現のもの（「全員無事着いた由報告し安心してもらった」）がそれぞれ1例ある。

次の4.2節では、連用中止形節で述べられる事態が、与益者に直接向かうのではないが主節事態を実現させるための状況を作り出す準備動作であるものを見ていく。

4.2 主節事態実現のための状況を作る準備動作

連用中止形節で準備動作について述べる文、例えば「ハガキを書き、弟に郵便局に出してもらった」では、従属節で述べられている事態「ハガキを書く」は、与益者「弟」に直接に向かう動作ではないが、主節事態の「郵便局に出す」を引き起こすための状況を整える準備動作であると言える。言い換えれば、与益者の動作を引き起こすための準備動作が従属節で述べられ、それを受けて、与益者の動作の引き起こし・実現が主節で述べられるのである。このような文は263用例中58例ある（2割）。

(28) 資金集めに、一枚二元の「愛心券」を作り、共青团員に買ってもらった。(奔流中国)

(29) 日常とは違う空間にヴァーチャルな物語を設定し、その中で遊んでもらう。(ラストチャンス)

(30) 三つのテーブルを用意した上で、テーブルクロスと照明を同じ色の組み合わせにし、会食してもらった。(元氣！になる94の秘訣)

(31) できるだけ具体的な要望を項目にまとめ、秘書に耳を傾けてもらう。(次世代政治家活用法)

(32) 流し台にあった食器を片づけ、整理整頓された環境を対象者に実感してもらった。(活動分析アプローチ)

(28) では、文中の「資金集めに」から分かるように、従属節で「一枚二元の「愛心券」を作る」という目的達成のための準備動作が述べられ、主節で与益者「共青团員」の意志動作「買う」の引き起こし・実現が述べられる。(29) では、従属節で「ヴァーチャルな物語を設定する」という準備動作が述べられ、主節で与益者の意志動作「遊ぶ」の引き起こし・実現が述べられる。(30) の従属節で一連の準備動作「三つのテーブルを用意して、テーブルクロスと照明を同じ色の組み合わせにし」が述べられ、主節で与益者の意志動作「会食する」の引き起こし・実現が述べられている。(31) (32) も同様である。

前節4.1節で扱った例では連用中止形節で与益者に直接向かう働きかけが述べられている一方、この節で扱う例の連用中止形節では、与益者に直接向かう動作ではないが、主節事態実現のため状況を作り出す準備動作が述べられる。この2種類の複文は従属節での動作が与益者に直接向かうかどうかという点では異なるが、両者はいずれも従属節事態が主節事態実現のための状況作りについての叙述であるという点で共通である。この2種類の複文における従属節と主節との関係は広義の原因—結果の関係を示している。すなわち、従属節事態の働きかけ・準備動作が原因・理由となり、主節の動作の引き起こし・実現が結果になっているのである。このような構造の影響を受け、主節におけるテモラウには受益者から与益者への働きかけの意味がうかがえ、使役に近い意味を表していると言える。このような複文は合わせて263例中148例あり、全体の6割近くを占めている。

4.3 単なる時間的に先行する事態や並列の事態など

この種の複文では、連用中止形節事態が表すのは時

間的に先行する事態や付帯状況、並列、無意志的な状態である原因などであり、以下にみるように、連用中止形節事態は基本的に、主節の使役性（引き起こし性）・受身性に影響することはない。すなわち、主節事態の中には使役的あるいは受身的に読みとれるものがあるとしても、それは、連用中止形節で述べられていることの影響ではなく、その他の文脈や一般的な常識などから、たまたまそのように感じとれるということに過ぎない。

（ア）時間的に先行する事態

(33) 千九百六十六年三月、前述したテーマで工学博士号を取得し、翌四月助手に採用してもらった。（復活！日本の半導体産業）

(34) 四時、血小板の輸血が連日続き、九時に点滴のルート入替えをした時の処置が不十分だったのか、十時に血液が逆流し、パジャマを交換してもらった。（敬子と愛のチェロ）

これらは連用中止形節で単なる時間的に先行する事態を述べる文であり、連用中止形節事態は主節のテモラウの意味に影響しない。(33)の主節は「採用された」といってもよく、受身的であるが、そのことは連用中止形節事態の影響ではない。(34)の主節のテモラウは使役的なのか受身的なのか分からない。

（イ）付帯状況

(35) これは、研修医時代に何かの本で「給料の1割は将来の自分のために投資せよ」というのを読んだことが影響しており、妻にもそれは了解してもらっている。（画像診断を考える）

(36) ただ、数名の側近に囲まれ、愚痴めいた言葉を聞いてもらうだけである。（双頭の鷲）

これらの連用中止形節で述べられているのは、主節事態が実現している時の周りの状況という広義の付帯状況である。例えば(35)では、主節事態「了解してもらっている」は、従属節事態「影響している」とい

う状況の中で実現しているのである。(36)も同様に、テ形節「数名の側近に囲まれ」で状況を示し、その状況下で主節事態の「聞いてもらう」が実現しているということが分かる。

（ウ）並列

(37) 冷チームの人たちにはコールド・スプレーで患部を冷やしてもらい、温チームの人たちには入浴をしてもらって患部を温めてもらいます。

（ためしてガッテン効果がすぐ出る安心健康法）

(38) 「真田殿には遠江に進出してもらい、中納言（前田利長）様には美濃を窺ってもらうか」（第三の覇者）

これらの文では連用中止形節で主節と並列する関係の事態が述べられている。並列を表す連用中止形の一般的な性質の影響で、連用中止形節と主節とが入れ替わっても文の意味が変わらない。この点においては他の「時間」「原因」や「付帯状況」の関係を示す従属節と異なる。例えば(37)は「温チームの人たちには入浴をしてもらって患部を温めてもらい、冷チームの人たちにはコールド・スプレーで患部を冷やしてもらいます」のように従属節と主節とを入れ替えても原文の意味が維持される。(38)は「中納言（前田利長）様には美濃を窺ってもらい、真田殿には遠江に進出してもらうか」に等しい。並列関係である場合も、複文の構造が主節のテモラウの意味解釈に影響しない。

（エ）無意志的な状態としての原因

(39) でも、もう満足に自分で顔をする（舞台化粧をする）こともできず、叔父にやってもらっていました。（福家族）

(40) でもアスラ彦といえど、この時代の文字は読めず滝先生に読んでもらう。（アスラ彦の青い鳥）

これらは連用中止形節で何らかの原因が述べられ、結果として主節で意志動作の実現が述べられる文であるが、その原因は前述の「働きかけ一動作の引き起こ

し」という性質の原因ではない。例えば (39) では従属節の「できず」は主節事態「叔父にやってもらっていました」が実現したことの原因であるが、それは働きかけという性質のものではなく、無意志的な状態が原因となったという性質のものである。この文を原因・理由節の複文「でも、もう満足に自分で顔をする（舞台化粧をする）こともできないので、叔父にやってもらってました」に言い換えても文の意味は変わらない。(40) も同様で「この時代の文字は読めないので滝先生に読んでもらう」に言い換えられる。このような無意志的な状態としての原因を表す連用中止形節事態も主節のテモラウの使役性（引き起こし性）・受身性に影響しない。(39) (40) の主節の「やってもらった」「読んでもらう」は使役性の方が強く感じられるが、それはたまたまその文脈がそのような解釈になったのみである。

以上の4節では主節述語となるテモラウの意味を、連用中止形節事態の内容に注目して考察した。主節のテモラウの意味と連用中止形節事態の内容との関係を以下の表に示す。

表1から次のことがうかがえる。「V-シ、V-テモラウ」構造の複文では、連用中止形節で主節事態実現のための状況を作り出すことを述べるもの、つまり与益者に直接向かう働きかけ（90例）と、与益者に直接向かうのではないが主節事態実現のための状況を作り

出す準備動作（58例）の2種類が合わせて148例あり、全体の6割近くを占めている。これらの複文におけるテモラウの意味は複文の構造の影響を受け、もっぱら使役的になる。一方、連用中止形節で単に時間的に前後する事態や並列の事態について述べる複文では、主節のテモラウの使役性（引き起こし性）・受身性は複文の構造に影響されず、したがってその意味は使役的、受身的、どちらとも言えない場合のいずれもありうる。

なお、呉（2020）で考察したテ形節の複文「V-シテ、V-テモラウ」を上記の表1と同じ方法で数えると、テ形節で主節事態実現のための状況の作り出しについて述べるものは9割以上である（連用中止形節の場合は6割近く）。このことから、テ形節と連用中止形節のテモラウの複文は非常に類似しており、両者は似たような傾向を示していることが分かる。一方、両者の相違点については、テ形節の複文より連用中止形節の複文の方が、単なる時間的前後関係や並列の関係を表すものが多くなることが指摘できる。これは、テ形節のほうが従属的、連用中止形節のほうが非従属的であるという両者の性質の一般的な違い（言語学研究会・構文論グループ1989a,b）の現れである。ただし、非従属的とされる連用中止形節でも、テモラウ文が主節となる場合は主節事態実現のための状況を作り出すことを述べる例の方が多くに注目される。

表1 主節のテモラウの意味と連用中止形節事態の内容との関係

主節のテモラウの意味 連用中止形節事態の内容		使役的	受身的	どちらとも言えない	計
主節事態実現のための状況の作り出し（4.1節, 4.2節）	与益者に直接向かう働きかけ（4.1節）	90	0	0	90
	与益者に直接向かうのではない準備動作（4.2節）	58	0	0	58
時間的に先行する事態や並列の事態（4.3節）		70	27	18	115
計		218	27	18	263

5. 「V-シ、V-（ラ）レル」の複文の性質

この節では、上記で考察した「V-シ、V-テモラウ」の構文と似た構造をとる受身の複文「V-シ、V-（ラ）レル」を対象に考察し、テモラウ・使役の複文と比較することを通して、「V-シ、V-テモラウ」構文におけるテモラウの意味が使役的になることが裏付けられることを述べる。分析する際は、テモラウの複文と同様に従属節事態と主節事態との関係、つまり従属節事態が動作主体（二格項）に向かう動作であるかどうかということと、従属節述語動詞の性質に注目する。

「V-シ、V-（ラ）レル」は、テモラウの複文「V-シ、V-テモラウ」と構造的に類似してはいるものの、意味的、機能的な面では大きく異なる。先に結論をいうと、「V-シ、V-（ラ）レル」の複文は、従属節で動作主体（二格項）に向かうのではない動きや状態が述べられるものの方が圧倒的に多い点や、従属節と主節との関係が単なる時間的前後関係であるものが圧倒的に多い点、また従属節の述語動詞に無意志動詞が多い点で、テモラウの複文と大きく異なる。以下、従属節事態が動作主体に向かう動作であるものとそうでないものの順に見ていく。

5.1 連用中止形節事態が動作主体（二格項）に向かう動作である場合

連用中止形節事態が動作主体に向かう動作である文は130中5例のみであり、非常に少ない。そのうち(41)(42)のように、主節で主語にとって好ましい事態が述べられ、そして従属節の動作は主節事態を引き起こすために行った事態と解釈されるが、(43)(44)のような文では、主節で主語にとって好ましくない事態が述べられ、そして従属節の動作は主節の事態を引き起こすために行った動作ではないと解釈される。

(A) 働きかけ

(41)探偵役を務める織田有楽（千五百四十七～千六百二十一）は、信長の弟で、本能寺の変

の後は秀吉の御伽衆となり、関ヶ原の合戦（千六百）では東軍につき、家康から山野辺郡に三万石を与えられた。（信長殺しは、秀吉か）
(42)最初の三年間はアメリカ支社でマーケティングに腕を奮い、三十歳の誕生日の前日に本社への異動を命じられた。（背徳）

(41)では動作主体「東軍」への「つき」という働きかけが述べられ、主節で意志動作「山野辺郡に三万石を与えられた」の実現が述べられている。(42)では、従属節で「腕を奮い」という働きかけが述べられ、主節で「本社への移動が命じられる」という事態の実現について述べられている。これらは、従属節の動作が主節の事態を引き起こすために行ったとして解釈され、そして主節事態は主語にとって好ましい事態である。このような主節の事態を引き起こすために従属節の動作が行われたという意味の文は5例のうち2例である。

(43)怒った音羽は仲舒に悪態の限りをつき、結果、彼女といっしょに放り出されたのだ。（えんの松原）
(44)彼は友だちを護るためにバンパイアと取引し、自分自身が半分バンパイアにされてしまう。（「ハリー・ポッター 4th」の魔法世界を冒険する）

従属節で動作主体への働きかけについて述べる5例のうちの3例は(43)(44)のような主節事態を引き起こすために従属節の動作を行ったのではない文である。(43)(44)では従属節で動作主体に向かう動作「悪態の限りをつき」「取引し」が原因となり、主節で「放り出される」「半分バンパイアにされてしまう」という事態の実現が結果として述べられているが、これらの従属節の動作は主節の事態を引き起こすためのものではない。このことは、受身の複文の主節事態のほとんどが主語にとって好ましくない事態であることから明らかである。この点において受身の複文は、テモラウの複文の従属節で述べられる働きかけは全て主節

事態を引き起こすために行った動作であるという性質と大きく異なる。

5.2 連用中止形節事態が動作主体に向かう動作ではない場合

この類の複文は 130 例中 125 例あり、圧倒的に多い。その中には、従属節と主節とが時間的前後関係をなすものや、動作主体に向かうのではない原因—理由の関係をなすもの、並列の関係をなすものがある。

(B) 時間的に先行する事態

このタイプの文は 125 例中 90 例あり、そのうち 81 例において従属節の述語動詞が無意志動詞であり、無意志動詞が多く用いられる点が特徴的である。次の (45) は無意志動詞が従属節述語の例であり、(46) では動詞の受身形、(47) では意志動詞が従属節述語として用いられているが、このうち (46) では、動詞「V」(「逮捕する」) 自体は意志動詞であるが、その受身形「逮捕される」は文全体の主語(「斉藤幸夫」) にとっては受動的な動作であり、一種の無意志動詞とみなせる。

(45) 祐は強い衝撃を受け、コートにたたきつけられた。(ザ・ミルキー・ウェイ)

(46) 斉藤幸夫は、示談解決済みの友人との喧嘩の事実を傷害罪という別件にされて逮捕され、警察署の留置場に入れられる。(世紀をこえて)

(47) 西川は上海を訪ね、若い男にいきなり声をかけられた。(コーヒー党奇談)

(C) 並列の関係

次の例は従属節と主節とが並列の関係をなす文であるが、このことは従属節事態と主節事態とを入れ替えられることから分かる。このような複文は 21 例あり、そのうち 17 例が無意志動詞が従属節述語となる文である。

(48) 井上の弟は全て他家の養子になっており、麟之助は継嗣の予備として残っていた。(大目付一件帳)

(49) 海外の社会主義運動に関する諮問に応じていたと思われる鷗外は、同時に、平出に欧州社会主義運動について三日四晩にわたって教授したと言われ、裁判を一度は傍聴したとも伝えている。(「帝国」の文学)

(D) 動作主体に向かうのではない原因

この (D) 類は上記の (B) 類と違って、従属節が動作主体に向かうのではない原因を述べるものである。このような例は 14 例ある。また、ほとんどが無意志動詞が従属節述語となる文である。

(50) 一方、山口兵内は田園の中の郷土にすぎず、浅野体制では農民としてしかあつかわれない。(城塞)

(51) ちょっとした戦場の現実に衝撃を受け、動けなくなり、間の抜けた行動を取り、殺されてしまう。(真珠湾の暁)

(50) は無意志動詞「(郷土に) 過ぎず」が従属節に用いられ、原因を表している。(51) では、従属節の意志動詞「行動を取り」が原因を表しているが、この動作は動作主体に向かうのではない。

以上で見た「V-シ、V-(ラ) レル」構造の複文における従属節と主節との関係を次頁の表に示す。

以上では「V-シ、V-(ラ) レル」の構造の文の性質を、従属節事態と主節との関係や述語動詞の性質に注目して考察し、その結果、従属節で動作主体(二格項)に向かう動作が述べられるものが非常に少ないことが分かった。その点においてテモラウ・使役の複文とは、性質が大きく異なる。3 者の異同については次の 6 節で図を示しながら詳しく述べていく。

表2 「V-シ、V-（ラ）レル」における連用中止形節と主節との関係と用例数

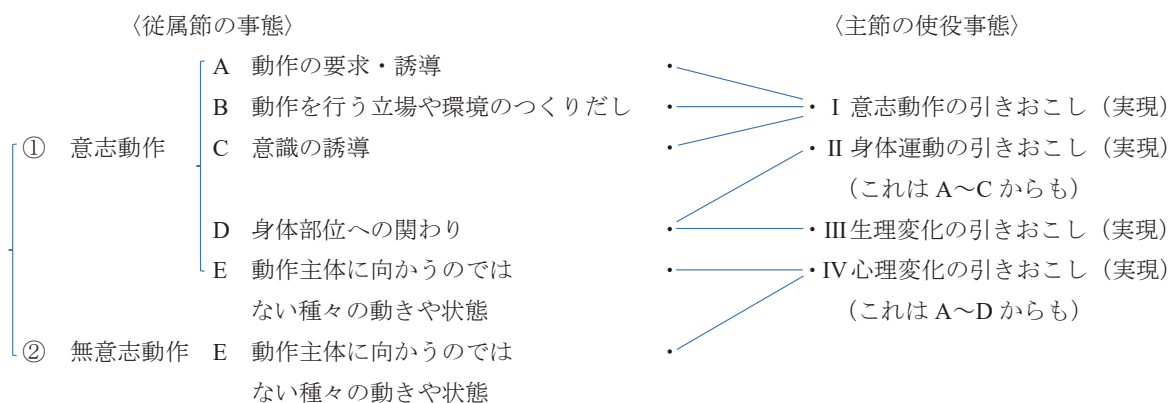
連用中止形節と主節との関係	下位類	用例数	割合
連用中止形節事態が動作主体に向かう動作	働きかけ	5	4%
連用中止形節事態が動作主体に向かう動作ではない	時間的に先行する事態	90	69%
	並列	21	16%
	動作主体に向かうのではない原因	14	11%
計		130	100%

6. 「V-シ（テ）、V-（サ）セル」・「V-シ（テ）、V-テモラウ」・「V-シ（テ）、V-（ラ）レル」の異同

早津（2015）で指摘されている使役の複文の類型化を参考にし、「V-シ、V-テモラウ」複文における従属

節事態と主節事態との関係を確認した。本稿で考察した連用中止形節の複文と呉（2020）で考察したテ形節複文とを合わせ、広義の原因—結果の関係を表す使役・テモラウ・受身の複文「V-シ（テ）、V-（サ）セル」・「V-シ（テ）、V-テモラウ」・「V-シ（テ）、V-（ラ）レル」の異同を次の図に示す。

図1 広義の原因—結果の「V-シ（テ）、V-（サ）セル」複文における従属節事態と主節事態との関係



（この図1は、早津（2015）に基づいて、従属節の事態が意志動作か無意志動作かを加えたものである。）

図2 広義の原因—結果の「V-シ（テ）、V-テモラウ」複文における従属節事態と主節事態との関係

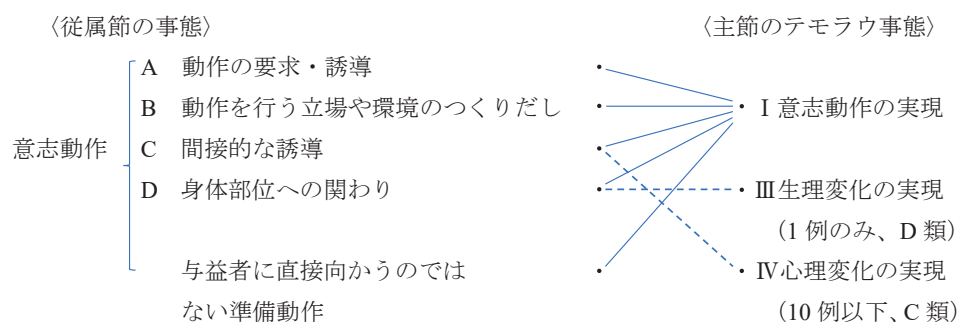
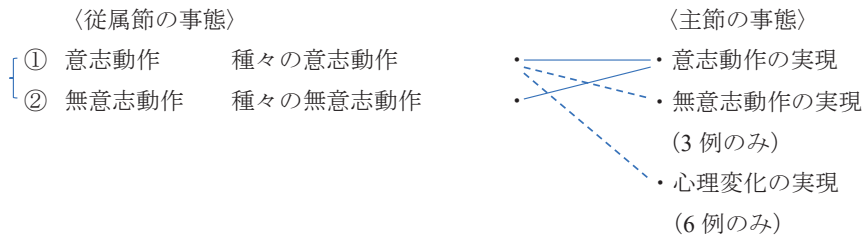


図3 広義の原因—結果の「V-シ(テ)、V-(ラ)レル」複文における従属節事態と主節事態との関係ⁱⁱⁱ

「V-シ(テ)、V-テモラウ」複文を中心として、使役・テモラウ・受身の複文を比較すると、上記の図から分かるように、「V-シ(テ)、V-テモラウ」構造の複文は、次にあげる3点において、使役の複文と類似しているが、受身の複文とは大きく異なる。

- ・従属節事態の内容から見ると、テモラウの複文と使役の複文では、従属節で動作主体(二格項)に向かう動作が述べられるものが多いが、受身の複文では、従属節で動作主体に向かう動作が述べられるものが非常に少ない。
- ・従属節と主節との関係を見ると、テモラウの複文と使役の複文においては、従属節と主節とが広義の原因—結果の関係をなすものが多く、単なる時間的前後関係や並列の関係を表すものが少ないのに対して、受身の複文においては、単なる時間的前後関係をなす文が多く、広義の原因—結果をなすものが少ない。また、3者における原因—結果の関係の本質が異なる。テモラウ・使役の複文においては従属節で動作主体に向かう働きかけや主節事態実現のための準備動作について述べられるものが多いため、両構文における〈原因—結果〉の関係の本質は、〈働きかけ—意志動作の実現〉の関係であるが、受身の複文における従属節と主節との関係の本質は、〈受動的なこと—動作の実現〉の関係である。
- ・従属節述語動詞のタイプという点においては、テモラウ・使役の複文における従属節の動詞のほとんどが意志動詞であるのに対し、受身の複

文における従属節の動詞のほとんどが無意志動詞である。このことは「V-シ(テ)、V-テモラウ」の構造の文におけるテモラウは使役的な意味になる傾向があることを裏付けていると言える。

7. まとめ

本稿では、呉(2020)に続き、主節テモラウの意味を明示するものとして連用中止形節を取り上げて考察した。従属節事態が与益者(二格項)に向かう動作であるかどうかということに注目して、主節におけるテモラウの意味を分析した結果、従属節で与益者に直接向かう働きかけが述べられる場合と、主節事態実現のための状況を作り出す準備動作が述べられる場合は、主節のテモラウは使役に近い意味を表す。それに対して、従属節事態が与益者に向かう動作ではない場合、つまり従属節と主節とが単なる時間的前後関係や並列の関係などの場合は、複文の構造が主節のテモラウの意味に影響せず、テモラウの意味は使役に近くなる場合や、受身に近くなる場合、どちらとも言えない場合がある。また、このことはテ形節の場合も同様に言える。さらに、似た構造をとる使役、受身の複文との比較を通して、テモラウ複文は使役の複文と似ているが、受身の複文とは大きく異なることが分かり、このことは、このような構造におけるテモラウが使役に近い意味を表すことを裏付けている。

今後も、複文の構造がテモラウの意味解釈に影響するという観点で、他の構造の複文におけるテモラウの意味を考察していく。

注

- i 本稿では、主節の述語を一重下線、従属節の述語を波線で示すこととする。
- ii BCCWJの「書籍」のジャンルで検索された15,146例を調査した結果、複文構造に用いられるテモラウ文は8割以上あることが分かった。
- iii 呉(2020)では、早津(2015)にならって、テ形節と主節との関係に注目し、テ形節事態を「A動作の要求・誘導」「B動作を行う立場や環境のつくりだし」「C間接的な誘導」「D身体部位への関わり」「E動作主体に向かうのではない種々の動きや状態」とに分類し、「V-シテ、V-テモラウ」の構造をとる複文におけるテモラウはほとんど使役に近い意味を表すことを述べている。
- iv 山田(2004)はテモラウの働きかけ性を「使役的」「許可的」「単純受影的」の3つのタイプに分けている。
- v 早津(2015)は早津(1998)を展開的に改稿したものである。
- vi 15,146例のうち、テモラウが主節述語となる複文の用例は1,065例あり、テ形節と連用中止形節の2種が合わせて全体の6割以上を占めている。従属節の種類と用例数は次の表の通りである。

従属節の種類	用例数	割合
テ形節（「母親に頼んで買ってもらう」）	403	38%
連用中止形節（「店に依頼し、郵送してもらう」）	263	25%
原因・理由節（「疲れているので弟に掃除してもらう」）	120	11%
条件節（「困ったことがあると友達に手伝ってもらう」）	51	5%
時間節（「ご飯を食べた後、妹に食器を洗ってもらう」）	48	4%
補足節（「「ありがとう」と言ってもらう」）	41	4%
その他（「仕事を完成させるために後輩に手伝ってもらう」）	144	13%
計	1,070	100%

- vii 後で詳しく述べるように、連用中止形節のテモラウの複文におけるC類は、呉(2020)で考察したテ形節の場合と同様で、早津(2015)が指摘している「C意識の誘導」とは異質の動詞であり、本稿ではテ形節の複文の場合と同様に「間接的な誘導」と呼ぶ。
- viii 早津(2015)が考察している使役の複文の場合は、ヲ格名詞をとる「動作誘導的な態度」を表すタイプの動詞類（「(人ヲ)うながして、あおって、扇動して、鼓舞して」）があるとされている。「V-シ、V-テモラウ」構文の従属節にもこのような動詞があってもおかしくないが、今回考察した用例では観察されなかった。
- ix この(c-4)類の複文は単なる時間的前後関係の複文と連続的であるとも言えるが、この類の従属節事態が主節事態のテモラウの意味解釈に何らかの関与がある点では、単なる時間的前後関係の複文と大きく異なる。例えば例(25)「当の歯科医にいき、自分が小さいころから、パティーマの名前で通していたことを、一筆書いてもらった。」を「自分が小さいころから、パティーマの名前で通していたことを、一筆書いてもらおうと思って、当の歯科医に行った」に言い換えられることから、従属節の「いき」という動作を通して「歯科医」に働きかけていることが伺え、この文は単なる時間的前後の関係ではない。それに対して、単なる時間的前後関係を表す複文の場合は、例えば「昨日学校に行って本を読み、夜になったら父親に迎えに来てもらった」は、「父親に迎えに来てもらおうと思って、学校に行って本を読んだ」とは考えられないので、従属節の「学校に行って、本を読んで」は働きかけ性がうかがえず、主節の「父親に迎えに来てもらった」の引き起こし性・使役性/受身性に影響しない。
- x ただし、観察された例(27)はレトリカルなものであり、文中の「かわいそうだが」をとると不自然に感じられることからもうかがえるように、周辺的な例である。
- xi (42)は、主節事態「本社への異動を命じられる」を引き起こすために「腕を奮い」という働きかけをしているとも見られるが、このような場合はごく稀である。
- xii 前述のように、広義の原因結果の関係を表す受身の複文は少ないが、3種の複文における原因-結果の関係の本質を述べるためにここに図を示すこととした。

参考文献

- 言語学研究会・構文論グループ (1989a) 「なかどめ—動詞の第二なかどめのばあい—」『ことばの科学 2』 pp. 11-47, むぎ書房
- 言語学研究会・構文論グループ (1989b) 「なかどめ—動詞の第一なかどめのばあい—」『ことばの科学 3』 pp. 163-179, むぎ書房
- 高京美 (2014) 「現代日本語の使役文に関する一研究: 文中における「V-サセル」の形・機能と意味とのかかわり」東京外国語大学, 博士論文
- 呉丹 (2020) 「複文におけるテモラウの意味—テ形節複文主節述語の場合—」『日本研究教育年報』 24, pp. 37-55, 東京外国語大学
- 寺村秀夫 (1982) 「日本語における単文、複文認定の問題」『講座日本語学 第 11 巻: 外国語との対照研究Ⅱ』 pp. 202-220, 明治書院
- 仁田義雄 (1995) 「シテ形接続をめぐって」仁田義雄編『複文の研究 (上)』 pp. 87-126, くろしお出版
- 仁田義雄 (2014) 「テ形」日本語文法学会 (編)『日本語文法辞典』 pp. 420-421, 大修館書店
- 日本語記述文法研究会 (編) (2008)『現代日本語文法 6 第 11 部 複文』くろしお出版
- 早津恵美子 (1998) 「複文構造の使役文についてのおぼえがき—従属節と主節との関係」『言語研究Ⅷ』 pp. 57-96, 東京外国語大学
- 早津恵美子 (2008) 「人名詞と動詞とのくみあわせ (試論): 連語のタイプとその体系」『語学研究所論集』 13, pp. 43-76, 東京外国語大学語学研究所
- 早津恵美子 (2015) 「日本語の使役文における使役主体から動作主体への働きかけの表現—従属節事態と主節の使役事態との関係—」『語学研究所論集』 20, pp. 1-13, 東京外国語大学語学研究所
- 益岡隆志 (2014) 「日本語の中立形接続とテ形接続の競合と共存」益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦 (編)『日本語複文構文の研究』 pp. 521-544, ひつじ書房
- 山田敏弘 (2004)『日本語のベネファクティブ—「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法—』明治書院

調査資料

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』

http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/